

ホーム
ページ
QRコード



ツイッター
QRコード

2021/12/1 No.88

発行者：社会福祉法人 ミッドナイトミッションのぞみ会
本 部：〒293-0023 千葉県富津市川名1436番地

主イエスがおられるクリスマス

望みの門理事・望みの門教会チャプレン
坂井 栄一



二十八年前、一九九三年、望みの門の合同クリスマスに初めて参加した。この年の四月に、同盟教団富津教会の牧師として赴任した。それで、クリスマス会に招待された。当時は、婦人保護施設の学園、養護老人ホーム楽生園、そして特別養護老人ホーム紫苑荘の三つの施設しかなかった。施設の行事であったから、私は、ただ来賓として招かれた。

私が席に着いた時、すでに学園の利用者は、リハビリホールの三分の一ほどの量敷きに座っていた。そこへ、楽生園の利用者がやって来た。元気に歩いて来る方もいれば、杖を突いて、職員や同僚に支えられるようになって来る方もいる。そこへ来た紫苑荘の利用者は、ほとんどの人が車椅子、中にはストレッチャーに寝たきりの方もいた。全盲の方も職員に手を引かれてやって来た。そんな方々で、それほど広くない会場は一杯になった。私が感動を受けたのは、その時であった。聖書の言葉を思い出した。「人々がイエスの

ところへ、いろいろな病気や痛みで苦しむ者、悪霊にとりつかれた者、発作に悩む者、体の麻痺した者など、あらゆる病人を連れて来た（マタイ四：一二四）」と。主イエスはこの群衆を見て、山に登り、あの有名な山上の説教を語り出されたのである。

私は、高校生三年で洗礼を受けた。それ以来、三十年余り、クリスマス礼拝を欠かしたことはなかった。毎年、主のご降誕を心から喜び、お祝いした。開拓途上の教会のクリスマス、ある程度歴史のある教会のクリスマス、どの教会も、降誕日は、それなりの飾りつけがなされ、人々が喜びで満たされていた。真実に主の降誕を祝うクリスマスであった。

望みの門のクリスマスに参加した時、そこに聖書の真実をそのまま見た。車椅子の人々の真ん中に、寝たきりの人の前に、目の見えない姉妹の脇に、キリストがおられるの心にはっきりと感じたのである。

神の子、主イエス・キリストが、王宮の奥深くでなく、神殿の聖域でもなく、家畜小屋にお生まれになった意味がよく分かった。世に置き去りにされた感のある羊飼ひ、博士と記されているけれど神を知らない、汚れていると言われる異邦人、そうした人々が、そのまま会える方として、神の御子は、一介の大工の子として生まれたのである。

望みの門が、法人として設立されて六十年。戦後、二人の宣教師が、日本の転落した女性たちに、主イエスを伝えようと、ドイツを出発したのは、さらに十年さかのぼる。望みの門の母体となったMBKミッションも、宣教師たちも、福祉施設を立ち上げることなど全く考えていなかった。ただ、ただ、純粹に、女性たちを救うために主イエス・キリストを伝えたかったのである。そのために何をしたらよいか、一心に祈り、導かれた結果、生まれたのが、今の望みの門である。

クリスチャンの少ない日本だけれど、それでも真の導き手は、神ご自身であられる。資金も何も無い中で、導かれるままに、一つの施設が出来上がり、それが普通に機能し始めると、主は、次にすべきことを示される。そして気がついたら今の規模になっていた。理事として四十年、祈り関わって来た私の実感である。利用者も職員も圧倒的に、ノンクリスチャンである。しかし、全能の神は、全てを支えてくださっている。しかも、独り子を救い主として、地上に送ってくださるほどの愛に満ちた方である。望みの門の背後には、いつも、父である神、そして主イエス・キリストがおられる。その意味で、望みの門は、他の施設とは一味違う。意識しなくても、利用者は、いつも主の御手に支えられている。職員は、

いつも主の御手として働いている。クリスマスの方の季節、望みの門に關わる全ての方に、主の祝福があるように祈ります。

恩寵六〇年
主共にいまして 3



神の家の同労者

ヤコブは眠りから覚めて言った。まことに主がこの場所におられるのに、私は知らなかった。そして、恐れおののいて言った。「ここはなんと畏れ多い場所だろう。これはまさしく神の家である。」



創世記二十八章十六―十七
常務理事 井本 義孝

リンデンホフでの三か月間はまさに至れり尽くせりの感があった。

それはそのはず周りは牧師、教師、看護師、そしてディアコニッセと呼ばれる生涯独身で神と人とに奉仕を誓った女性の皆さんとの研修会に参加していたのである。

四月半ばに始まったこの合宿ゼミもやがて七月初めに終わりを迎えた。それぞれ別れを惜しみながら再会を約し

た。ペーテルには歴史のある神学校（ホッホシューレと呼ばれる単科大学）がありしばらく在籍するつもりで入学手続きをとった。

また生活費と居場所づくりのため重度障害者施設「マハナイム」で介護職員として働くこととした。かくして実に得難いドイツでの福祉体験が始まったのである。

居場所は施設内の職員住宅で広さは十五畳程度あった。窓の外を見ればマロニエの大きな木があり広い庭を白髪の老女が黙々と歩いていたのが印象的であった。

マハナイムでの生活は大変厳しいものであった。炊事はしなかったが介護に掃除、洗濯はまことに重労働で、それでも毎朝職員が交互に司会をして祈りをささげるのには感じ入ったものである。ある時入浴介助の最中、マックス君が突然立ち上がり滑って転び額を切り顔面血だらけになった。こちらは動転したが本人はけろりとしていた。

この頃体調に異変を感じるようになった。疲れているのに眠れないのである。

ワイン一本空けても酔わない。あくる日診療所に行った。フロート先生の診断はホームシックと言うことであった。それもその筈ここマハナイムに来るまでは牧師をはじめそれぞれ立派な職業人で、ただ一人の日本人であり、それもゲストとしての処遇を受けていた。

それが急転直下、片言ドイツ語で重度障害者施設の職員と共に介護にあたることになったのであるから周りも迷惑、本人も相当心身のストレスであったに違いないと、今更のように思われる。それから夢中で知っている限りの日本の歌を歌った。もちろん日本語で。自分の声自分を安らかにしたと言えれば言い過ぎかもしれない。まことに言葉は人を癒す力があることを実感したものである。聖書には「はじめに言葉があった。言葉は神と共にあった。言葉は神であった。」(ヨハネによる福音書1:1)とある。

この体験は実に強烈で、言葉の持つ神的力量、大切さをつくづくと思わされたものであった。同時に自分の不信仰さを恥ずかしく思った。マハナイムでの今一つの思い出はこの年七月二十日アポロ11号の月面到着であった。朝四時ごろ夜勤のリヒターさんがドアを叩き「義孝起きろ」とテレビの前に誘い、今まさに、アームストロング船長が月に一步を踏み出すところを見、「小さな一步だが人類にとっては偉大な一步である。」との言葉と共に月面到着のシーンも忘れ難い。数か月は経過し間もなくクリスマスを迎える時期、重度棟マハナイムにもクリスマスツリーが飾られた頃、ハンブルクから思わぬ朗報が届いた。

(未了)

東京望みの門 自立援助ホーム マナの家

ふくらはぎは第二の心臓

生活指導員 岩崎 妙子

去年からコロナで自粛を余儀なくされていましたが、皆様どのようにお過ごしでしょうか。今や緊急事態宣言が解除され、飲食店の営業時間や酒類の提供の制限もなくなりまし。秋の行楽シーズンということもあり、休日ともなると、去年に比べて人の出が多くなったのを感じます。

さて、私はコロナ禍でも体は動かさなきやと、休みの日は長距離ウォーキングに出かけられています。日々、出来るだけ歩くように心がけていますが、月に一度くらい、二十kmを超える距離を歩きます。



私は旅客機が大好きなので、時々羽田空港に歩きに行きます。その距離約二十二km。環七をひたすら南下するのですが、途中二回、休憩を取ります。七、八km歩いたら休むといった感じです。所要時間は休憩込みで六時間く

らい、歩数は三四、〇〇〇歩くらいです。去年から今年にかけて、羽田は五回歩いていますが、それでも六時間かけて歩いてきて、吹きさらしの展望デッキに出た時の開放感と達成感は、何度来ても気持ちがいいものです。もはや私にとって、羽田は「歩いて行くところ」になってしまいました。(笑)

なぜ私がウォーキングを続けているかと言うと、ふくらはぎは全身の筋肉の中で、一番鍛えて損のない部分だと思っているからです。タイトルにも書かせていただきましたが、ふくらはぎは第二の心臓と言われているほど重要な筋肉で、全身の七十%を占めると言われている下半身の血液を、ふくらはぎの筋肉がポンプの役割をして、心臓に戻してくれるのです。全身の血流が良いのは健康の基本ですね！

よかったら皆様も歩くことを日課にされて



みてはいかがでしょうか。かと言って、ただ歩くだけではつまらないものです。たとえば「この景色を見たい!」「この電車に乗りたい!」などの目的があると、より楽しく歩けると思います。今は紅葉が美しい時期ですので、沿道の木々を見ながら歩くだけでもステキだと思います。

最後に、大好きな旅客機と、東京スカイツリーの「地球」をイメージした限定ライトアップの写真で癒されてください♪

婦人保護施設 望みの門学園

学園の引越し



心理相談員 福原 麻衣

望みの門学園に配属となり二年半が経ちました。それまでは相談業務に携わっていたため地域支援から生活支援へと対象が変わり、当初は不安もありましたが日々周りに助けを頂きながら過ごしています。

望みの門学園は一九八〇年に建てられ、約四十一年もの間、利用者と思いい出を共にしてきました。そして今年の八月、「望みの門本館」へ移転となりました。

私は引越しと縁があるようでこれまでの職場で三度の移転作業を経験してきました。今

回で四度目の移転作業を迎える事となりましたが、それまでの純粹な職場移転と異なり生活の場が移り変わる事への利用者の心の変化や様々な声を聴く機会になりました。

引越しに対しての想いは年齢や入所年数、価値観などにもより、利用者一人ひとり違ったものでした。新しい住まいへの喜びや期待の声も聞こえ、

一方で荷物の整理に苦慮したり長年住み慣れた場所への思い入れや新居での生活に対し漠然とした不安を抱いたり、引越し後も環境変化にかななかついてい



現学園



旧学園

けず、眠れない・気分が落ち込む等健康面への影響も見られる方がいました。慣れない場に移り住み、新生活を始めることは、気づかぬうちに大きなストレスがかかります。引越し直後は、見るもの聞くものすべてが新鮮で、心身の状態を振り返る暇もないものと思います。こうした期間は、心身ともに緊張と興奮が続き、通常より何倍も頑張れたり不調に陥りやすいのです。

そもそも人はどうして変化に対して不安な気持ちになるのでしょうか。ヒトの脳は、新たな挑戦やチャンスによってある程度の恐怖心が起こるようにできています。新たな挑戦やチャンスというのはまさに「変化」に置き換えることができます。恐れる事は、自分を守るための大切な働きの一つなのです。

「変化」は常に身近にあり、人はそれを乗り越え生きています。時折以前の園舎に戻りたいと話す利用者さんも、以前は不安が全くなかった訳ではなく、その都度あらゆる変化に対し適応していく強さを持っていました。

新たな学園での生活を通して利用者にとって、自分なりのペースで生活に向き合い、利用者一人一人が自分の人生を見つめていける場でありたいと思います。これからも利用者にとってより良い生活の助けになるよう努めていきたいです。

養護老人ホーム 望みの門楽生園

望みの門楽生園に異動して

事務員 比護 菜都美

のぞみ会に入職して一年、養護老人ホーム望みの門楽生園に異動して半年が経ちました。右も左も分からないまま事務職の世界へ飛び込み不安や緊張でいっぱいだったことを今でも覚えています。そして私の人生の中で一番フラストレーションを感じた一年でした。望みの門楽生園に異動して初めに、「この空気感懐かしい。」と感じました。前職は、介護士として現場で働いていたからでしょうか。始めは名前と顔が一致せず、コミュニケーションを取る

ことすらひと苦労でしたが、今では毎日「おはようございます。今日もよろしくお願ひします。お手柔らかに〜。」と毎日利用者の皆様とハイ



タッチすることが日課となっています。望みの門楽生園は、養護老人ホームということで様々な事情を抱えた利用者の皆様ですが、私の方がたくさんパワーと癒しを頂いています。私も負けずに利用者の皆様にパワーをお届け出来るよう頑張りたいと思います。

さて、望みの門楽生園に異動して半年。よく、「慣れましたか?」と声を掛けてくださる方がいますが、まだまだ慣れたとは程遠く「慣れました!」と自信を持って言えない自分と、慣れも怖いと感じている自分がいます。事務の仕事始めて一年経った今も毎月毎日慌ただしく精一杯業務をこなす日々ですが、やっと楽しさややりがいを感じられるようになりました。自信を持って「慣れました!」と答えられるよう、しっかり勉強してたくさん吸収出来るよう精一杯頑張りたいと思います。

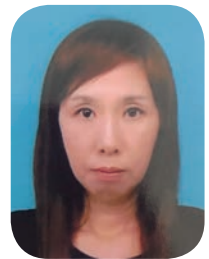
特別養護老人ホーム 望みの門紫苑荘

介護職に就いて



介護員 高田 史香

望みの門紫苑荘に入職して六年が経ちました。当初は非常勤として働いていましたが、正規職員として二年目になりました。



います。

介護職では日常のように『嚥下』や『褥瘡』など、未だに漢字で書けると言われてもなかなか書けない言葉をよく使います。

嚥下障害は年齢に関係なく、健康な人でも体験することがあります。食べ物や水分が食道ではなく、誤って気管に入ってしまった(入りかかった)ために起こる現象です。高齢者の肺炎の多くが誤嚥と言われており、七十歳以上では七十%以上が、九十歳以上では九十五%近くが誤嚥性肺炎であると言われているようです。

介護現場において飲食物が食道でなく気管に入ってしまう誤嚥により肺炎になってしまったら、窒息してしまうなど命の危険と直結してしまう嚥下動作。そのため食事の介助場面でも一人ひとりの状態に合わせた介護が必要となります。

『嚥下』という言葉について調べたら、少し興味深い事があったので書こうと思います。『嚥下』とは単純に飲み込むこと、飲み込む動作だけを意味します。

この『嚙下』の嚙という漢字は、口と燕(つばめ)という字から成り立っています。

そして、英語では飲み込むことを『Swallow (スワロー)』と言います。この『Swallow (スワロー)』には鳥の燕という意味もあります。プロ野球チームの、東京ヤクルトスワローズでお馴染みです。(ヤクルトのマスコットの名前は『つば九郎』と『つばみ』)

『燕』と『飲み込む』異なる言語間での偶然とは思えない一致でした。ツバメのヒナが親ツバメからエサをもらっている姿は洋の東西問わず、飲み込む動作を連想させるのだと思います。

私が介護職に就いて、今日まで続けて来れたのは、毎日が興味深いからです。

利用者様をお世話させて頂いていると、人っておもしろい! 人ってすばらしい! と日々感じます。介護職は一生続けたい仕事です。

特別養護老人ホーム 望みの門 富士見の里
季節感を楽しむ食事

調理員 前沢 悠太

オリンピックの熱気も相まって例年以上に暑かった気がした夏もあったという間に過ぎ

て、早いもので今年も残すところあとわずかとなりました。

冬になると冬の味覚の王様のカニやお鍋には欠かせない白菜、コタツで食べると美味しみかん等、旬の食べ物が目白押しですが、皆さんの好きな旬の食べ物はなんですか?

これまでお誕生会食は、お赤飯、てんぷら、炊き合わせ、和え物、焼き魚(冬季は刺身)など通年提供していましたが、今年、富士見の里厨房では、『誕生会担当は季節の食材を使用し、献立の立案・実施』を部門目標に掲げ、様々なアイデアを取り入れた誕生会食を作ってきました。

春には畑で採れた新じゃが芋を使った料理、シラス御飯や桜エビご飯、初夏には初物のスイカをメニューに加え、季節感を味覚でも楽しんで頂きました。

また、冷製の茶碗蒸しや、いなりずしなど今まで献立で出てこなかったような料理も出て誕生会食のバリ



エーションが広がりました。

十月に私の担当が巡って来ました。今回は趣向を変えて中華な誕生会食をやってみようと思いましたが、寒くなってきてトロミで体も温かいカニあんかけチャーハン、エビチリは少し辛いのでエビマヨネーズ和えに、シューマイ、小鉢に棒棒鶏、冬と言えば中華まんということで桃の形のおまんまをデザートにしてみました。あまり季節感が出なかったのですが目に新しい誕生会食になりました。

先月には畑で採れたサツマイモを使っておやつ時間に焼きいもを焼きました。今年もサツマイモが不作であり大きいものは収穫できませんでしたが、なるべく大きそうなのは、おやつ時間に焼き芋を提供しました。一階のホールから見るところでパーベキューコンロを使い、焼いている所を目や耳でも楽しんで頂きました。

これからの時期は畑で大根や春菊が収穫できるので、様々な料理を提供できると思います。旬料理だけでなく、利用者様が安心して花見や遠足に出かけ、四季を楽しんで頂けるような世界情勢になることを願うばかりです。



老人デイサービス事業 望みの門デイサービスセンター この一年を振り返って

介護員兼生活相談員 氏川 聡

のぞみ会に入職、望みの門デイサービスセンターに配属されて約一年が経過しました。以前は主に特別養護老人ホームで介護職員として勤務していました。この一年で得た気付きなどの振り返り、デイサービスの移転などについて書いていきたいと思います。

以前勤務していた特別養護老人ホームでは、介護度が重い利用者が多い中、限られた時間、職員数で利用者のケアを行うために、利用者の食事や入浴の時間など一日の日課が細かく決められていました。職員はその日課に沿って業務を行うため、利用者の食事や入浴時の衣類の着脱、洗身などで、利用者ができるけど時間がかかりそうなことなどは職員がやって



あげていました。そのため、デイサービスで勤務を始めた当初、利用者ができることでも時間がかかりそうなことは過剰にやってあげようとしていました。しかし、デイサービスの利用者は在宅で生活しています。在宅での生活を継続するには利用者の主体性や身体機能の維持、向上などが必要になります。過剰な介助は利用者の自立を妨げ、身体機能を衰えさせてしまう可能性があります。利用者のできることをよく見極め、できることは利用者本人に任せる。デイサービスに勤務してから自立支援の視点の大切さを改めて認識しました。

九月にデイサービスは望みの門本館一階に移転しました。六月末に竣工したばかりの新しい施設です。玄関、フロアが広くなり、以前に比べ利用者の送迎車とフロアの移動などスムーズに行えるようになりました。浴室も最新の設備で広々としており、利用者の方にゆっくりと入浴していただけます。また、フロアにはソファ、リクライニングシート、マッサージ機などがあり利用者の方にゆったりと過ごしていただけるスペースもあります。このように施設の設備面ではとても充実したものになっています。

今後、今はコロナの感染で制限されていますが、ボランティアの来訪や利用者外出など

レクリエーションの充実を図り、利用者の方がより楽しく過ごせるデイサービスを目指していきたいと思えます。

就労継続支援事業 望みの門新生舎 新規事業への取り組み

副施設長 渡邊 宏子

新生舎にとって令和三年度は本館の完成を一番間近で見ただけでなく、共に環境を整える一年となりました。また、コロナ禍における感染予防に努めながら、通所事業所として制限された環境の中で利用者様に安定した日中活動を提供するために試行錯誤した一年でもありました。

このような状況の中ですが、本館のオープンに伴い新規事業として緑地の管理と一階部の窓掃除等を請け負わせて頂くことになり、十月から本格的に活動をスタートしています。

主に第二作業部に所属する利用者様が三、四名ずつのグループに分かれて計画的に活動を進めていきますが、利用者様の士気を高める効果もあり揃いのTシャツにジャンパー姿で取り組んでいます。お掃除ロボットを活用した窓掃除、緑地の除草作業など順次進めていきますが、ロータリー中央には季節の花々



を植えお客様を出迎えています。また、同時にデイサービスで使用されている公用車を中心に洗車作業も行っており、様々な場所で利用者様が活躍させて頂いております。

外部の方にはなかなか見え難い姿なのですが、作業に行く時は必ず「行ってきます！」と元気に挨拶してから出かけます。終了報告もしかりで、大変満足気に誇らしい表情で報告にきます。来訪されたお客様や職員の皆様にも良く声を掛けて頂けるようになり皆さん大変張り切って取り組まれています。

障がい者を取り巻く環境は年々変化しており様々な法律ができる中で守られるものも増えていますがその反面、平等を求めるが故に甘えられない厳しい面も併せ持っています。新生舎は就労支援事業所とあるように、職業準備訓練の場であり利用者様個々の持てる力を引き出し社会に繋げていく使命があります。

す。また、工賃を支給するといった責務もあるため、安定した収入を得るためには非常に厳しい現状もあります。

利用者様一人ひとりの適性や力量を見極め、意欲的に活動できる場を提供するのはもちろんですが、何より「自分たちが必要とされる場所」を見い出すことが一番大切であるように思います。新規事業を提供して頂いたことに感謝し、活動に向け一丸となっている作業部の活躍にこれからも期待していきたいと思えます。



世話人兼生活支援員 角谷 幸子

「おはよう！」「ハイ起きて〜！」「顔洗ったあ？」「いってらっしゃい！」「グレースホームの一日が始まりました。

グレースホームは第一グレース七名・第二グレース四名・第三グレース男性五名・第四グレース五名の計二十名の利用者さんが入所しており現在満床です。平均年齢六十歳、二十歳から八十歳までのとグレースホームも高齢化になってきました。住まいが二階・三階という高齢者には厳しい条件である為、毎

日の階段運動や散歩を欠かさず、足腰を鍛えております。

約二年のコロナ感染症により我慢の生活を強いられてきましたが、感染症に罹る事もなく、ようやく外出等が徐々に出来るようになりました。ご家族の皆様からも『面会は控ええます。』『団体生活ですから感染症を持ち込むと大変なことになるので帰省させないでください。』等のご理解を不す温かいお言葉とご協力をして頂き感謝いたします。利用者さんは待ちに待った買い物外出に二年間の我慢が爆発したかのように喜びお店ではあれもこれもと買い物をしておりました。

第一グレースが中心となり行っている畑『グレースファーム』は毎シーズン様々な野菜を収穫しております。

十一月には芋掘りを行い、急な呼びかけにも関わらず、ほとんどの利用者さんが参加したようです。その他にも時折第一の利用者さんから各ホームに野菜が届き、世話人さんの手によって取り立ての新鮮な野菜が二時間後には食卓に並びます。

どのホームも料理がとてもおいしい！！食欲旺盛な利用者さん！世話人さんに感謝です♥

世話人の仕事は全職員九名で行っており、

交代で支援にあたっており、出勤後はそれぞれの担当ホームに分かれ家族の中心的役割となり利用者さんの生活全般を支える重要な仕事です。

朝は起床か

ら日中活動に送り出すまで、夕方は迎え入れから就寝まで、どこ家庭にもあるような笑い声や、叱咤する声がグレースホームでも響き渡っている毎日です。栄養バランスを考へたり、利用者同士のトラブルを解決したり、ちょっとしたことも見逃してはいけないと支援するお母さん役の職員。『家と同じ様にやればいいから簡単』『誰にでもできる仕事』と思われがちですが、時間内に料理を作りながら利用者さんに目を向け支援しなくてはならないので実は大変な仕事なんですよ。

十五時半！『ただいまあ〜』

日中支援から利用者さん達が帰ってきまして。夕食は新生舎の新米と焼魚と煮物にサラダと季節の果物！



『おかえり〜』『手を洗っておやつだよ』『明日の準備終わってるう〜』『お風呂〜!!』
今日も世話人の声が響き渡りグレースホームの夜が始まります。

千葉県中核地域生活支援センター 君津ふくしネット
「寄り添う支援」の大切さ

相談支援員 後藤 玲子

令和二年九月より君津ふくしネットに着任し一年経ちました。

君津ふくしネットは千葉県の委託事業で君津圏域四市の福祉の総合相談支援事業所として、三六五日二十四時間体制で活動しております。

子どもから高齢者・障害者、制度の狭間にある方などに包括的な相談支援や行政・関係機関へのバックアップ、複合的な課題や狭間のニーズに対して寄り添いながら支援を行っている事業所です。

コロナ禍において生活困窮をはじめ、ひきこもりや障害者虐待・DVの相談が多く寄せられております。

包括的な相談が多い為、他機関との連携も多く行政・児童相談所・保健所・地域包括支援センターや障害児者相談支援事業所等と協

働して対応する事も多いです。
このような状況の中でも相談者への丁寧な傾聴を行い、支援が届いていない方へのアウトリーチ等を通じた繋がりをづくりながら支援に取り組んでおります。

ここでの相談は複雑化・複合化した内容が多い為、センター長をはじめ看護師である副センター長、臨床心理士と専門職が揃っているため、教えていただきながら一つ一つ丁寧に対応できるよう心掛けています。相談の中には、ご近所トラブルの通報や三十年以上引きこもっている方等の大変難しいケース対応を求められる場合があります。また、ここでの相談は終結が少なく、継続的に関わりを持つ必要のある方の対応もあります。

今後も相談者に寄り添いながら困りごとに対して一つずつ課題を解消し、その地域で安心して生活がおくれる様に支援していけるよう頑張りたいと思います。

富津市富津地区地域包括支援センター
八年目に入った地域包括

事務員 松浦 順子

こんにちは、私は富津地区地域包括支援センターで事務員をしています。

事務員の業務は前任者に残して頂いた仕事を
書を見て進めてきました。その後会計や勤怠
等を課長に教わりながら行ってきました。

地域包括の仕事は先日行われた実践発表
大会で紹介された他にも沢山あります。今
年八月目を迎えた地域包括は、利用者数も
増え個人情報や資料も多くなってきました。
一人の利用者様でも相談受付票から始まり
委託や包括の直営のバインダーとファイル
場所が分かれていました。そんな中市役所
や警察から問い合わせがあった時に迅速に
情報を取り出すのに時間がかかってしま
いました。職員で考え、相談受付票と支援経
過で五十音順にする事にしました。一人一
ファイルにして並べると大変見やすく取り出
し易くなりました。

しかし、ファイルが増えた分置く所が足り
なくなってしまうという事態になりました。
新しく鍵付の棚を購入をしたくても予算には



入っていません。次年度に持越か、と思っ
ていた時、本館に引越する訪問看護ステーショ
ンさんで使用していたキャビネットを譲って
もらえる事になりました。なんとという幸運で
しょう。早速新生舎でトラックを借り頂きに
行かせてもらいました。ありがとうございます。

今後各ファイルを年度毎に見直し、適正に
管理していく様にしていきます。まずはそれ
ぞれの名簿を作成している所です。

児童養護施設 望みの門かざの里
大人(職員)に求められるもの!
—日々の苦しさ(課題)の整理を—

施設長 戸波 宏幸

里は開設十六年目を迎えています。これま
で卒園生二十四名を送り出す中、十三年を超
える経験を積み上げてきた職員数名もおりま
すが、より多くの職員がこの業に就き、離れ
て行っています。日々子どもたちの言葉には
「大人(職員)はウザイ!.....」「本当の親で
も無いくせに!.....」「私のこと分かってく
れていない!.....」等のきつい表現・思い
があります。子どもたちとの関係が取れ始め
た頃の一言は、より重く胸に突き刺さります。
併せて登校しぶり、里や学校での不応行動

が続くと、担当者の心には「お願い、落ち着
いてくれ!この切なさ・苦しさは何だ!逃れ
たい!」の思いが溢れます。抱え込んだ後
には、弱音を吐けない反動にて、職員間の稀薄
さ・組織のケア不足等、普段しまい込まれて
いる不満(苦しさ)の領域に、抱えた子ども
との苦しさをぶつけたくなります。

様々な機関研修にて、子どもたちの刺さる
言葉・表現は、安心・安全だからこそ、信頼
するからこそ、口撃(攻撃)ですよと教示
しています。同時に、「大人(職員)が抱え
た苦しさは、そのままその子の苦しさですよ」
と結んでいます。子ども一人ひとりのもがき・
苦しさに寄り添うからこそ、大人(職員)も
切なさ苦しさを抱えると言えます。専門職と
して理解・自覚するも、感情は善し悪し問わ
ず、職員の力量相応に生まれます。だからこ
そ子どもたちの声を傾け理解し受け止める心
の援助技術が磨かれると思います。日々の営
みの中、この時あの時の子どもの言動により、
職員の葛藤く苦しさが綴られます。

大切なのは、職員個々が抱えた「この苦
しさ」は何なのかを整理することです。
「大人(職員)の苦しさは、子ども
の苦しさ」に立ち返り、専門職として立ち向かうべき「自
身の苦しさ(課題)」なのか、それとも、チー

ム力で立ち向かうべき「組織の苦しさ(課題)」なのか。同輩・先輩・上司を巻き込んでの整理が必要です。この仕事(整理)をおろそかにすると、得てして子どもに矢が向けられ「課題児への対応」が目的となり、苦しさを遠ざけ逃れようとなります。何のく誰の苦しさ(課題)なのか……。

一方で、大人(職員)の努力、踏ん張りが子どもに伝わって行くことの大切さがあります。子どもとのやりとりにて「だって、大人(職員)の仕事でしょ!」「そうだよ!」だけども〇〇さん、あなたの気持ちを思い、大事な仕事を止めあなたの都合を優先したんだよ!」「えー!本当そうなの」「ありがとうの気持ちを伝えてくれるとありがたいな!」私の立ち位置(施設長)だからこそその会話とも言えません。『あなたの両親の代わりはできません』あなたの両親が果たさなければならなかった役割を、他人ですが仕事としてきちんと果た



しますよ!』この覚悟にて接する大人(職員)との間にも、信愛く親愛は育まれ築かれます。自分のために……悩み苦しみを向いてくれる人の存在は、どの子どもにも癒しとなり財産となります。日々の苦しさを整理しながら、大人(職員)の踏ん張りが子どもたちに伝わって行く暮らしこそ、施策は変わっても変えてはならない児童養護施設の使命と思われれます。

乳児院 望みの門方舟乳児園 異動挨拶



施設長 白鳥 正道

去る十月一日付でデイサービスから方舟乳児園へ異動となりました。デイサービスは九月の本館引越し以来あっという間に一か月が過ぎ利用者、職員それぞれに本館のデイサービスという新しい空間を居心地のいい空間として受け入れてくださっているのではないかと感じているところです。

私自身デイサービスへの異動から三年半という大変短い間でしたが介護保険にかかわり、入所施設しか知らない身としては、要介護者だけでなく介護者の視点でも在宅生活の現実を見させていただき自分の中の課題と向

き合うきっかけとなりました。今あることを心から感謝する日々です。

これからは乳児院の施設長として業務にあたりますが、当然ブランクもあるため気持ち的には落ち着かない日々が続きます。

まずは乳児院を取り巻く環境や制度の理解が必要で、その中にある方舟乳児園の立ち位置を確認する必要があると思います。そのうえであるべき姿を理解すること、昨年策定された「千葉県の子供たちを虐待から守る基本計画」の推進のために果たすべき役割を淡々と進めていくことが自分に与えられた課題だと考えます。デイへの異動の際、確かに新しい養育への取り組みについて国からのおおまかな中長期計画が出ていたのは覚えていますが、現場で進めていくのに相当なエネルギーは必要であろうことは当時でも予想できていました。その時から

実際千葉県の基本計画が出されたことによる時の流れをひしひしと感じます。



現在方舟で生活する子供たちも、それぞれに課題を抱えています。人生の中でのほんの一瞬、お預かりする施設としては安心安全に過ごせる環境の提供と、次のステップへの助走をそれぞれのペースでとりつつ、これから長く生活する環境へ子供やその養育者、あるいは支援者を含めスムーズな移行のお手伝いできればと考えます。

私自身まだ何もできていない状況ですが方舟とそこで生活する子供や職員のためにお祈りいただければ幸いです。

望みの門里親支援センター

センター長 井本 義樹

「子どもが守られ、安心して

成長できる社会の実現」にむけて②

本年度初めに同じタイトルで寄稿させていただきました。前回は乳児院の職員としての立場で書かせていただきましたが、今回は本年十月から始動した「望みの門里親支援センター」の職員として書かせていただいていますことをご了承ください。

平成二十八年の児童福祉法改正で、児童の権利擁護が大幅に見直されることとなり、国は各都道府県等に対し「都道府県社会的養育

推進計画の策定要領」（以下、推進計画）を發布し、これに則り各都道府県等では、推進計画が策定されました。本県においては令和二年六月に「千葉県子どもを虐待から守る基本計画」という名称で推進計画が発表されました。その中で、①児童虐待の防止に向けた取組、②家庭的養育の推進に向けた取組、③児童相談所の強化に向けた取組が計画され、社会的養育から家庭的養育への推進を大きく加速させる動きが計画されました。

当センターでは、主に②家庭的養育の推進に向けた取組の中で、千葉県が主な目標として掲げている一、里親委託率二十七・九%から四〇・〇%、二、登録里親数五八六組から八五二組、三、施設小規模化の実施状況二十施設から全二十七施設（すべて平成三十年年度の数値、目標達成は令和十一年度）、以上の三点の向上に寄与するために、どのような働きが出来るかを模索し始めています。基本計画には「……里親委託の推進に向けた取組を強化します。また、児童養護施設や乳児院における子どもの養育環境の向上に向けた取組を支援するとともに、子どもたちの将来的な自立に向けた支援の強化を図ります。」とあり、これらの取組の実現することでタイトルにあるような社会が実現すると考えます。今後とも当センターの働きにご支援、ご協力

を宜しくお願い致します。

児童家庭支援センター 望みの門ピーターパンの家 ゼロからのスタート

相談支援員 白井 詩織

何度かの異動を経験し、今年の四月から児童家庭支援センター望みの門ピーターパンの家に着任いたしました。今までは全て入所施設でしたので、初めての相談業務で戸惑いもありました。児童家庭支援センターがどんな所かわからない、ゼロからのスタートでした。みなさんは児童家庭支援センターをご存知でしょうか？一言で言うと、地域の子どもと家庭の相談に応じる機関です。県内には十二センターあり、それぞれの特色や強みを活かした活動をしています。

ピーターパンの家では、子どもやその保護者等の相談を伺い、必要に応じて関係機関と連携しながら環境調整をし、子どもが安定した生活を送れるように支援しています。また、里親支援や乳幼児健診での相談員派遣、子育て講座の講師等、関係機関と共に地域の子育て支援の一端も担っています。富津市役所出張所の設置や木下記念学園クリニックの併設は、他にはないピーターパンの家の大きな特

色です。また、ピーターパンの家は、スタッフが三名の小さな職場であるため、直接、利用者に関わる以外にも色々な業務があり、それぞれのTPOにあった自分の役割を意識して関わっていく必要性を感じています。

私がピーターパンの家で勤務して半年が過ぎましたが、ピーターパンの家では親子の気持ちのケアができることが強みだと感じています。保護者とは、お話をじっくり聞きながら、困りごとと一緒に整理していきます。時には気分転換に楽しくおしゃべりすることもあります。子どもには、発達の確認や遊びや作業の中で気持ちの整理や発散をするプレイセラピーを行なっています。親子で利用してもらうことで、保護者も子どもも少しずつ元気を取り戻していくように感じています。私も子どもと楽しく遊んだり、保護者と一緒に悩んだり、お子さんのかわいいエピソードを聞いて嬉しく感じたりしながら、利用者のお手伝いが



出来るように積極的に専門的知識を学んできたと思います。

児童心理治療施設 望みの門木下記念学園



児童指導員 木村 静

新卒者として木下記念学園に入職してから早くも八ヶ月が過ぎました。私は児童心理治療施設にて

子どもの成長を支えたいという「将来の夢」を抱いていたため、四月一日に児童指導員として施設を訪れた際は、「夢が叶った」という嬉しさでいっぱいでした。ですが、子どもに対し「正しさ」とは何かを教えていくこの仕事は、数年前までは未成年であり社会に出て間もない自分にとって、あまりにも経験不足であることに気がつきました。そのような未熟者の自分が子どもたちと向き合うことは、子どもたちの成長にプラスになるのかと葛藤しています。

子どもが数ある「道」の中から進もうとしている「道」に迷った時、間違った「道」に進みそうになっている時、あるいは進ん

でしまった時、自分がその子どもに正しい「道」を教え導くことができているのか、と自問自答する日々です。現在はそれができたと実感する時はほとんどありません。ですが、このように何もできていない自分に対し、笑顔で向かってきてくれる子ども、優しさをくれる子ども、試練を与えてくれる子どもがいると、「ああ、頑張ろう」と思うことができます。

子どもの成長を促す役目がある自分が、反対に子どもが自分の成長を助けてくれているように感じます。

昨年に続き、今年も新型コロナウイルス感染症流行の影響で、施設でも行動の制限がなされ、子どもたちは以前より窮屈な生活を送っています。そのような状況下でも、施設のグラウンドでフットサルをしながら汗を流す姿、一つの牛乳パックからアイデアを絞り工作をする姿、「宿題が多い」と嘆きながらも最後まで取り組む姿等があり、それらの姿を見ていると子どもたちは一日一日を一生懸命に生きていることを実感します。

児童指導員として子どもと関わり八ヶ月経過した私が掲げる目標は、「一人ひとりの子どもに対し、最後まで一生懸命に向き合うこと」。これが、子どもたちが私に示してくれた「道」です。

クリスマス



チャペル委員 神田 督

クリスマスは神さまからのスペシャルプレゼントだと思えます。エデンの園の「善悪の知識の木」の実を取って食べたが故に、この楽園から追われたアダムとイブは、神さまのご恩寵（恵み・慈しみ）に背き、地上を彷徨うしかない罪びと（神さまから離れ、背を向けている状態）としての人類の始祖になりました。

神さまはこの罪びとの状態から救い出し、神さまとの交わりが回復できるようにと、人類を深く憐れんでくださいました。

神さまの一方的な恵みにより、神さまの独り子イエス・キリスト（人間と同じ姿になられた）を地上に遣わし、十字架の犠牲を通して、人間の罪を贖い続けていくことができます。これにより、私たち罪深い人間も神さまのご恩寵を永遠にいただくことができるようになったのです。唯々感謝するほかありません。これがクリスマスのスペシャルプレゼントです。

ご家族、恋人、友人、知人と、美味しいクリスマス・ケーキをいただきながら、このスペシャルプレゼントも深く静かに感謝と喜びをもって味わいたいものですね。

メリークリスマス！

表彰されました

望みの門学園田尻隆施設長と山口寿美子副施設長は十月二十九日（金）婦人保護事業六十五周年記念厚生労働大臣表彰における婦人保護事業功労者に対する厚生労働大臣表彰並びに感謝状の贈呈を本館シオンホールにて受けました。

今回は厚生労働省での表彰式は行われず、千葉県健康福祉部児童家庭課篠塚かおる課長に表彰伝達を頂きました。ありがとうございました。



編集後記

ある調査機関が今年の五月、二〇二一年のクリスマスはどのように過ごしたか、生活者へ意向調査を行いました。「特に何もしたくない」（四十三・七％）人を除くと、「一位は「家で「うちそうを食べたい（おうちパーティー）」で二十四・七％。次いで、「家で行事食を食べたい」（一八・三％）、「家族だけでお祝いをしたい」（二〇・三％）となりました。

二〇二一年内はまだ新型コロナウイルスの影響が残っていると考えている人が多いのでしょうか。家族で、おうちで過ごしたいという意向が強く出ていました。クリスマスにおいても先行き不透明という印象が強いためか、おうちで家族と過ごしたいという生活者意向が強くなっているようです。

さて二〇〇〇年前、夜通し野原で羊の番をしている羊飼（当時の羊飼いは畑を荒らす迷惑な人々とみられていました）に天使がこう告げました。「今日ダビデの街で、あなたがたのために救い主がお生まれになった。」家族や友人と楽しく過ごすクリスマス。救い主は羊飼いのように感謝されず認められずに働いている人々と共に働くために、今も来てくださいます。休む間もなく介護の現場で働く人、一人ベットで横になる高齢者、親元を離れつらい思いをしている子どもたちに、天使はこう告げます。「救い主はあなたのために来られた。」と。